

2023年5月

第152号

ぱれっと



（株）北日本ベストサポート

TEL 018-883-1888

人口減少と秋田県の未来

秋田県の人口減少率が10年連続で全国連続ワーストワンとなった、由々しい事と言わざるを得ない。一体、秋田県の未来はどうなるのだろうか。

秋田県の人口は昭和31年(1956年)約135万人をピークに減少に転じ、一時持ち直しの動きもみられたものの、長期低落傾向が続き令和2年(2020年)には約96万人となっている。国立社会保障・人口問題研究所(社人研)推計では令和27年(2045年)には約60万2千人になると予測されている。

社人研では、0歳から14歳までを「年少人口」、15歳から64歳までを「生産年齢人口」、65歳以上を「高齢人口」として3区分に分類している。年少人口は昭和25年(1950年)の約50万人をピークとして減少しており、その後、生産年齢の減少と次々に次世代の人口が減少する傾向となっている。令和27年(2045年)には「年少人口」が全体の10%にも満たなくなる一方、「高齢人口」が50%を上回る予測となっており、ますます若年層が減少し、このままでは人口増加はほとんど見込めない状況に陥っている。

秋田県の場合、年少人口が激減する一方、結婚年齢も高くなっており、子供の出生も30代が増加傾向となっている。昭和20年代に比べると子供の出生数も大幅な減少が続いている。こうした「自然減」が続く一方、進学や就職などのために県外へ流出するいわゆる「社会減」の割合も高くなっている。平成26年(2014年)に卒業した高校生は約半数が県外に流出しており、大学進学者は県内進学が30.5%、県外進学が69.5%になっており、そのうち卒業後県内就職者は約34.4%にとどまっており、高校卒業者の県内就職者は61.5%となっている。

このように、「自然減」「社会減」により人口減少が続くと予測されているが、驚くなかれ令和27年(2024年)は総人口が602千人、令和47年(2065年)には362千人まで減少する見込みとなっている。

人口問題は確かに雇用の場の問題や賃金水準、娯楽の場の確保など魅力ある秋田を作ることが大切だが、「子供は社会の宝」として抜本的に対策をたてる必要がある。数年前にオランダへ旅した際、日本人の大学生ガイドが案内してくれた。話を聞くと「オランダでは大学の授業料は国が全額負担してくれるのでオランダの大学に入学した。自分は生活費を稼ぐために働いている」との話だった。子ども手当の所得制限撤廃問題で右往左往している状況では抜本的改革はおぼつかない。国がやらなくとも市町村が率先して独自の支援策を講じて安心して子育てができ、社会全体で子どもの出生と育成を全面的に支援する社会を構築しない以上、秋田県の未来に希望を見出すことも発展も望むこともできない。それも、効果は30年以上先の話となり絶望的状況にあることを理解しておきたい。

自分を知ることから始めよう

ニーチェの言葉

自分についてごまかしたり、自分に嘘をついたりしてやりすごすべきではない。自分に対してはいつも誠実であり、自分がいったいどういう人間なのか、どういう心の癖があり、どういう考え方や反応をするのか、よく知っておくべきだ。

なぜならば、自分をよく知っていないと、愛を愛として感じられなくなってしまうからだ。

愛するために、愛されるために、まずは自分を知ることから始めるのだ。

自分さえも知らずして、相手を知ることなどできないからだ。

【曙光】

怠惰から生まれる信念



ニーチェの言葉

積極的な情熱が意見を形づくり、ついには主義主張というものを生む。たいせつなのは、そのあとだ。

自分の意見や主張を全面的に認めてもらいたいがために、いつまでもこだわっていると、意見や主義主張はこりかたまり、信念というものに変化してしまう。信念がある人というのはなんとなく偉いように思われているが、その人は、自分のかつての意見をずっと持っているだけであり、その時点から精神が止まってしまっている人なのだ。

つまり、精神の怠惰が信念をつくっているというわけだ。

どんなに正しそうに見える意見も主張も、絶えず新陳代謝を繰り返し、時代の変化の中で考え直され、つくり直されていかなければいけない。

【人間的な、あまりに人間的な】

自分の眼で見よう



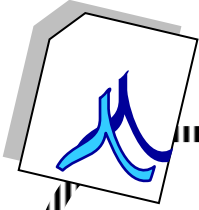
ニーチェの言葉

スイスのジュネーヴから見るモンブラン周辺の山々は美しく、表情の豊かさにあふれている。それなのに、「モンブランは最高峰で天然美に包まれている」という観光的な知識のせいで、人々の眼はモンブランのみに注がれている。

これでは、自分の眼を本当に楽しませることはできない。

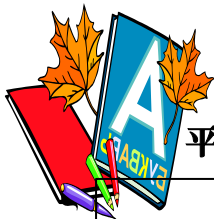
知識ではなく、自分の眼が今とらえている美しさを認めるようにしよう。

【漂泊者とその影】



ベニー・グットマン (アメリカのクラリネット奏者・バンドリーダー)

- 1909年5月30日 ロシア系ユダヤ移民である縫製職人の9男としてシカゴに生まれる。「ハル・ハウス」という福祉施設で教育を受け、音楽も学ぶ。
- 1919年 10歳の頃、元シカゴ音楽大学教師からクラリネットの手ほどきを受ける。
- 1920年 11歳で演奏家としてデビュー。
- 1923年 コルネット奏者のビックス・バイダーベックと共演。
- 1925年 ベン・ポラック楽団に参加。
- 1928年 本拠地をニューヨークに移し、翌年よりソロの演奏活動を始める。
- 1932年 自分で楽団を結成し、NBC ラジオに定期出演。ダンスホールで成功、全米での人気を獲得した。
- 1938年 カーネギー・ホールで最初のジャズコンサートを開催。スウィングの王様と称されるに至った。代表曲としては「シング・シング・シング」が挙げられる。その後、クラシック音楽の分野でも活躍し、モーツァルトのクラリネット協奏曲、クラリネット五重奏曲などが有名。
- 1958年・1964年・1980年 来日公演。演奏活動は1986年まで。
- 1986年6月13日 死去。享年77歳。



「彼女たちの山」

平成の時代、女性はどう山を登ったか 著者 柏 澄子 出版社 山と溪谷社

著者は、千葉県生まれフリーライター。日本山岳ガイド協会認定登山ガイド、日本山岳協会常務理事等を務める。山岳に対する著作多数。

本書は、平成に登った5人の女性登山家の壮絶な山への挑戦の実話集だ。

山野井妙子はクライマーとして夫とともに臨んだギャチュンカン(チベット自治区)北壁。その下降が壮絶だった。2日かけて500mしか下降できない。荷物のほとんどを捨て、身軽にしても二人共凍傷にかかって指を切断した。

田部井淳子(日本人女性でエベレストに初登頂)については「淳子のてっぺん」で紹介している。裏方の国内山小屋管理人の活動等も紹介。



GW は日本だけ？意外と知らない豆知識

学校も会社もお休みなどところが多く、日本人の楽しみのひとつとしても有名なゴールデンウィーク。この祝日は、昭和 23 年 7 月に「国民の休日」と法律として制定されたことが始まりとなり、世に広まっていきました。第二次世界大戦が昭和 20 年ですので、戦後まもなく制定された法律です。そして、法律で定められている大型連休は、じつは日本にしかありません。特に GW のような「祝日が固まっている」状態は、海外の情報を追っていても中々お目にかかれませぬ。そもそも GW は、以下のような国内の歴史や風習になぞらえて制定された日が集まってできたものです。

4 月 29 日「昭和の日」

…昭和 63 年までは昭和天皇の「天皇誕生日」でしたが、崩御された昭和 64(平成元)年に「みどりの日」となり、平成 19 年に『激動の日々を経て、復興を遂げた昭和の時代を顧み、国の将来に思いをいたす』日として「昭和の日」に変更。

5 月 3 日「憲法記念日」

…日本国憲法が昭和 22 年 5 月 3 日に施行されたのを記念し、昭和 23 年に制定。

5 月 4 日「みどりの日」

…4 月 29 日が「昭和の日」となったため、「みどりの日」が 5 月 4 日に移設。

5 月 5 日「こどもの日」

…『こどもの人格を重んじ、こどもの幸福をはかるとともに、母に感謝する日』として制定。

それぞれの日が日本にちなんだ祝日であり、「日本にしかない」特別な祝日となっています。昭和はまさに「激動の時代」。戦後の焼け野原から生き残った人々が「前へ！前へ！」と進んでいく中で、この法律は制定されました。戦争で亡くなった同心や家族を胸に復興を支えてきた人々が家族のもとへ戻り、団らんする。今も昔も「日本人のひとときの安息日」であることに間違いはありません。

まもなく GW を迎えようとしています。なかなか会えなかった家族のもとへ帰省されるかたも多いことでしょう。かけがえのない時間となるよう有意義な GW を過ごしましょう。

【編集後記】

県議会議員選挙や市町村議会選挙が終了した。

秋田市会議員や大館市会議員のトップ当選者はいずれも同市会議員立候補者のうち最年少者になった。秋田市は30歳、大館市は25歳である。若い人たちが将来の秋田を想い、情熱を傾けて秋田を活性化させて欲しいものである。

若者が自分たちの住む社会を永続的に発展させ幸せを享受できる社会を作っていたきたい。

未来はあなたたちのものである精一杯羽ばたいて欲しい。